

同級会の季節

昨年の夏、第57回のコラム「物語は何処に？」で郷里での同窓会の様子を書かせて頂いた。今年の夏もその季節が巡ってきた。若い時には「都会」に憧れ、「田舎育ち」を恨めしく思ったものだが、今は「田舎」がある事を感じている。情報と刺激溢れる「都会」も大好きだが、自然と静寂溢れる「田舎」も大好きだ。が、60年の時の経過は自分の「田舎」を確実に変えて来ている。もちろん建物や道路や街並みは多少の変化はあるが、多分他の町と比べ、大分「昔」が残っている。何せ、つい最近まで「四賀村」（今



は松本市）という山に囲まれた典型的な山村であったから。確実に変わったのは、もちろん時の経過に伴う人々の変化である。近所のおじさん、おばさんは確実に歳をとり、亡くなった方も多い。級友や遊び友達も還暦を超え、多くは定年退職を迎え、現役から退きつつある。64、65歳は、外見はどうあれ（？）、まだ若い。会社勤めの生活から、年金生活への転換の中で、皆、自分の新しいポジションを探しあぐねているのではないかと思う。団塊世代の一番お尻にあたる我々は、まだ社会から引退してしまっているし、かと言って、65歳定年のこの時代に、会社でのポジションからは多くの人は引く事を迫られる。若い思春期時代の自分の生き方の模索と不安とはまた違ったレベルでやはり、自分の人生の振り返りとこれからの決して短くは無い残された人生をどう過ごして行くのか、そこはかとなく問われているのではないのだろうか？

清野吉光氏のコラム 第69回

団塊耕志録

清野 吉光(きよの よしみつ) 略歴

1950年 長野県四賀村生まれ、松本深志高校卒業。1968年上智大学外国学部ロシア語科入学、1971年 中退。その後印刷関係など様々な職業に従事。1976年清水市の日の丸交通入社。1980年静岡市内の事務機器センターに入社。1982年システムオリジンを仲間と創業、専務取締役。1992年代表取締役社長就任。2000年㈱タクシーサイト創立、現取締役会長。2007年タクシーアシスト代表取締役社長に新任。現在に至る。



続・物語は何処に？

4割の出席率！

昨年は1965年度卒業の、村でたった一つの中学の同窓会であった。14年振りに開かれたこの同窓会を機に、5クラスあった学年の4組目の我がクラスだけで「同級会」を開く事になり、同級の女性が嫁いだ松本市内の寿司割烹の「ながた寿司」で、8月16日に集まる事になった。40名チョットのクラスで16名の出席は、確かに高校とは違い、中学の同窓生は地元に住んでいる人が多いとはいえ結構盛況で、中には、中学卒業以来50年振りという人が何人もいた。長年会わなかった同窓会の常とは言え、「エツ！」というお互いの外見の変化に戸惑う人も多いが、しかし、どこかに、必ず当時の面影を残しているものである。清野などは歩き方を見て、「あ、清野さんだ」などと女性から言われて、ひどく落ち込んだ（そんなに変わってないと密かに自負していたのに……）。これもお決まりの近況報告とい

う事になり、各人の定年後の生活がたんたんと語られる。当然、田舎なので家で片手間の農業をしている人が多く、決してのんびり隠遁生活とはいかないようだ。清野も50年振りに会う中学時代の親友（当時はできたばかりの弱小プラスバンドの仲間、いつもの金魚のフン（と言われてた）のように行動を共にしていた）に報告するつもりで、自分の簡単な歴史と近況を語った。彼はこの50年の清野の物語を、どう感じてくれただろうか？皆の簡単な個人史を聞いてみると、意外に感ずる場合もあるが、しかし、多くは中学時代のその人の性格や考え方というものの、結果的に沿った人生になっているんだという



思いを強くした。いろんな偶然や運で、人の一生は随分左右されると思われるし、実際左右されているのだけけれど、こうして第一次（？）リタイヤをしてみると、不思議に帳尻があっているような気がする。その人らしさがその人生に出ているのではないかと思う。来年は一泊二日で、どこかで泊まりがけでやろうと言う事になった。第2次リタイヤまでに、新たな物語をそれぞれに、是非作っておきたいものだ。多分、自分の物語を作るという事については、定年は無い筈だから…。

もうひとつの同窓会

「同窓会」は友人とだけでは無く、ある意味最も濃密な「同窓」である、家族についても行われるべきである。田舎へのお盆の帰省は、友人との物語の確認、共有だけでなく、自分の祖先（というピンと来ないが）、親、兄弟、姉妹との家族の物語の共有、確認の機会でもある。今回、別々に住んでいる89歳の母と73歳の兄とそ

れぞれに、じっくりと話す時間があつた。夫々に、筆者の生まれる前の家族の出来ごと、とりわけ母は昭和初年の生まれで、昭和恐慌、太平洋戦争など日本の歴史の中で苦難の時期を生きながら、昭和20年3月の東京大空襲も経験し、慣れない田舎への疎開、食糧難の時期に、人一倍の波乱の人生を送つた。兄も東京からの疎開後の家の苦境、その中で味わつた苦勞を語つた。9人兄弟姉妹の末子である自分は御蔭で一番のううと生きる事ができた。父は1898年（明治31年）の四賀村の生まれで、8歳から建具屋の丁稚奉公をし、若くして東京に出て、建具職人から、軍用トラックの床材を扱う軍需産業に取り組み、いわゆる「成り金」となつた。当時の時代風潮もあり、複雑な家庭を作つたが、東京の大空襲で、深川に四つあつた工場が焼け出され、出身地の四賀村に疎開した。その後、名誉職の村会議員や農業協同組合長などを勤め、またその後様々な商売を手がけたが、うま

く行かず、結局、丁稚時代に身に付けた建具屋を始めた。その時、すでに60歳を超えていた事になる。小さい時、はっきり言って父はあまり好きではなかつた。自分は父の52歳の時の子供で、歳が離れすぎており、じっくりと話す機会は無かつた。22年前父は94歳で亡くなつたが、本当に物語溢れる波乱の人生であつた。今、兄とも改めて話すのだが、父の話を、特に若い時の波乱万丈の話をもっと聞いてみたかつた。いま曲がりなりに事業を運営する立場に立ち、父親が関東大震災や昭和恐慌、太平洋戦争と続く激動の時代で、どのように考え、商売をして



いったのかを率直に聞いてみたい気がする。父の物語はまた、祖父の歴史や父の兄弟・姉妹の歴史と深く関与し、四賀村、会田村の歴史とも関与する。その昔、「ルーツ」という本が話題になつたが、3代くらい前から家族の歴史を、その時代の社会的出来ごとと共に年表風に整理したいと改めて思つた。また今の日本では「会社」もまた、ある意味「同窓」であり、物語と歴史を紡いでいる。その中で作り上げてきた価値観や大事にしたい「思い」がある。「社史」はそうした社員の「それぞれ」の物語」とそこに込められた思いを記録し、継承する為の重要な手段であると思う。オリジンの「社史編纂委員会」もそのような趣旨で運営したい。また「社史」同様、「家族史」も各家族で作成されるようになれば、家族の絆は深まり、継承され、社会的な紐帯も深まり、良い社会が建設されるのではないかと思う。それはもしかしたら団塊世代の役割かも知れない。

(2014年8月21日記)

タクシー買取専門店だから出来る高価買取
LPG、ガソリン、過走行、低年式等でも大丈夫!

株式会社ジェット
☎ 03-6454-9896

〒174-0041 東京都板橋区舟渡 1-15-9 ブローブ浮間舟渡 101 FAX: 03-6454-9994 東京都公安委員会 第305561207814号